

李白「黄鶴楼送孟浩然之広陵」詩考

——その解釈をめぐって——

渡 部 英 喜

一 はじめに

詩仙と称された李白（七〇一〜七六二）の傑作の一つに、「黄鶴楼送孟浩然之広陵（黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る）」と題する七言絶句がある。この作品はわが国では、中学校の国語の教科書を始め、高等学校の国語や古典の教材にも取り扱われているほど人口に膾炙している唐詩である。また、現代の中国でも小学校の教科書に掲載されるほどの作品である。

「黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る」詩は王維（六九九〜七五九）と並んで、唐代の代表的な自然詩人の一人に数えられている孟浩然（六八九〜七四〇）が広陵（揚州）に向けて旅立って行く時に、長江の川べりの黄鶴磯に建つ黄鶴楼で餞として作って贈った離別詩である。

李白の作品は離別に関する詩がかなり大きな比重を占めているように思われる。それを松浦友久氏はその著『李白研究―抒情の構造―』（三省堂、昭和五十一年三月一五日発行）の中で、

李白における離別詩は、第一義的には、「留別」と「送」の部に収められる。『分類補注』本で言えば、巻十五（三五首）が「留別」、巻十六〜巻十八（二〇〇首）が「送」であり、宋本では巻十三から巻十六、王琦本では十五から十八までが、それに当たる。しかし、このほかにも「赤壁歌、送別」（巻八）や「別内赴微」（三首（巻二五）のように、「歌吟」や「閨情」等の部門にも、離別を

李白「黄鶴楼送孟浩然之広陵」詩考（渡部）

テーマとするものが含まれているため、こうした範囲の作品を含めるとすれば、およそ一六〇首が、離別詩の対象として考えられることになる。これは、約一〇五〇首の全作品のうち一五・五％をしめるものであり、李白に前後する主要詩人たちとくらべて、かなり大きな比率と言つてよい。

と書き綴っている。更に続けて松浦氏は李白の離別詩と他の主要詩人の離別詩との比較を試みている。次に、松浦氏の論述を表に纏めてみると、

	詩 総 数	離 別 詩 総 数	百 分 率
李 白	約一、〇五〇首	一六〇首	一五・五
杜 甫	約一、四五〇首	一三〇首	八・五
白居易	二、八〇〇首	一八〇首	六・五
韓 愈	三七〇首	三〇首	七・八
王 維	四一五首	七三首	一七・五

のようになる。右の表を眺めれば一目瞭然であるが、李白と王維の離別詩の比率が他の作者と比べて際立って高いことが分かる。

李白と王維の離別詩を比較してみると、李白の離別に関する作品が王維の離別詩よりも百分率では二ポイント劣っているが、離別詩の総

数では二倍強と圧倒的に多いことも分かる。つまり、唐代の主要な作家の中でも、李白は離別詩でも、第一人者であったと言えることができる。

李白の離別詩の中でも、「友人を送る」詩や「金陵酒肆留別」詩などと並んで、今日なお、人々の口に上り、愛唱され続けている作品の一つである「黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る」詩は、その解釈をめぐってこれまで様々な見解がなされてきたように思われる。そこで、諸家が通釈した例を幾つか引用しながら、詩中で用いられている詩語——漢字の音通や漢字の持つ字面など——を通して、私見を述べてみたいと思う。

二 創作時期について

先ず、名作「黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る」詩を提示し、その後に、この作品がいつ頃創作されたものであるということを考えてみたいと思う。

故人西辞黄鶴楼
烟花三月下揚州
孤帆遠影碧空尽
唯見長江天際流

故人西のかた黄鶴楼を辞し
烟花三月揚州に下る
孤帆の遠影碧空に尽き
唯だ見る長江の天際に流るるを

(黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る)

この「黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る」と題する作詩の時期は定かではないが、孟浩然が開元二十八(七四〇)年、五十二歳で世を去っていることを考えれば、李白の四十歳以前に作られたものであることは疑いのない事実であろう。

李白と孟浩然の交友関係を考察するには、

④人物(李白と孟浩然)の略歴をみることに。

⑤地名(揚州)の来歴をみることに。

という二つの観点から推察する以外には方法はなからう。しかし、李白と孟浩然の略歴には不明なる点が多すぎて、はっきりした事実を知ることなど困難なことである。

李白と孟浩然の交友が始まったのは、李白が二十五・六歳で、故里の蜀(四川省)の地を離れた以降のことであろう。『旧唐書』や『新唐書』という正史によれば、孟浩然が隠棲していた鹿門山(湖北省襄樊市)を出て、国都長安に遊んだのが四十歳の頃であるから、李白の二十七・八歳の頃ではないかと思われる。

有力な説には、二十七歳説を始め、三十歳前後と三十七歳などがある。因に二十七歳を唱えるのは詹鍈であり、安旗という中国の学者である。この説を唱えるわが国の学者には大野実之助がいる。三十歳前後という説を唱えるのは愛知大学の中島敏夫氏である。また、三十七歳説は黄錫珪である。このように、作詩の時期には三つの説があるとみえられている。

次に、地名(広陵及び揚州)の来歴について眺めてみたい。地名は詩題に「広陵」とあり、第二句に「揚州」とある。「揚州」とは、現在の江蘇省揚州市のことであり、詩題の「広陵」は揚州の古名である。『中国市県大辞典』(中共中央党校出版社、九一年八月発行)の「揚州」の項には、

春秋時先属呉、後属越、再属楚。秦代設広陵県、属九江郡。西漢時初属荊国、呉国。後為江都国、広陵国。東漢時為広陵郡。東晋初、復立広陵県。隋改為揚州總管府。唐為江淮重鎮。宋属淮南東路。元属江淮行中書省、河南行省、淮東道宣慰司、淮南行省。明置淮南府、惟揚府、揚州府。清初置揚州府隸于江南布政使司。民国初年、廃府設江都県属淮揚道、後直隸江蘇省。中華人民共和国成立後、城区改立揚州市。(以下、略)。(傍線部及び波線部は筆者)

という説明がなされている。『中国市県大辞典』によれば、広陵という地名は、秦代から東晋にかけて幾つか散見している。一方、揚州という地名は隋代以降に見出すことができる。つまり、広陵も揚州も、唐代以前から使われている古い地名であり、李白が詩中で用いている何ら不思議なことではない。しかしながら、中島敏夫氏は「広陵は揚州（現・江蘇省揚州市）の古名。唐でも郡制が取られた時に広陵郡となるが、それは天宝元年（七四二）から乾元元年（七五八）までの間で、孟浩然が七四〇年にすでに死亡しているから唐の郡名ではない」（学習研究社）としている。

この詩の確かな創作時期を特定することは難しいように思われる。従って、今回は三つの説があることを指摘するだけにとどめ、折をみて新たに考察したいと思う。

三 詩の解釈をめぐって

A 前半の二句について

では、「黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る」詩の内容に触れてみたい。先ず初めに、諸家の通釈を幾つか掲載する。最初は青木正児の『李白』（集英社、昭和四〇年五月三十一日発行）を引用したい。それは、

- ① 故いなじみは西のかた黄鶴楼に於て別れを告げて、花咲き春霞立つ三月に揚州へ下つて行く。（傍線部及び波線部は筆者。以下同じ）

と、ある。次は、松浦友久編訳の『李白詩選』（岩波文庫、九七年一月一六日発行）には、

- ② わが親しき友は、いま西のかた黄鶴楼に別れをつけ、春がすみに花々の煙る三月、遙かな揚州へと下つてゆく。

李白「黄鶴楼送孟浩然之広陵」詩考（渡部）

と、ある。また、松浦友久編『校注唐詩解釈辞典』（大修館書店、八七年十一月一日発行）に収める坂田新氏の通釈には、

- ③ わが友は西のかた黄鶴楼に別れを告げ、春もやに花咲きかおる三月の揚州へと下つていく。

と、ある。石川忠久博士のNHK漢詩をよむ『李白』（日本放送出版協会、昭和六三年四月一日発行）の中では、

- ④ わが友、孟浩然先生は、西にあるこの黄鶴楼に別れを告げ、春がすみに花咲き匂う春三月、揚州へと下つてゆく。

と、口語訳している。また、前野直彬氏の中国名詩鑑賞3『李白』（小沢書店、九六年七月一五日発行）には、

- ⑤ わが友は西方なる武昌の地に立つ黄鶴楼に別れを告げ、かすみと花に包まれた春三月、揚州へと下つて行く。

という通釈を施している。また、安楽充郎氏は『唐詩百選』（かや書房、九六年十二月八日発行）で、

- ⑥ 我が友、孟浩然は、西方の地にあるこの黄鶴楼に別れを告げ、春霞に花の咲く、三月、揚州へと下つてゆく。

と、訳し、斉藤昶は漢詩選7の『唐詩選・下』（集英社、九六年九月二六日発行）では、

- ⑦ わが友は、西のかた、黄鶴楼にわかれを告げて、かすみと花のさきそろうた春三月、揚州へ向かってたつて行った。

と、訳している。次に、中島敏夫氏の『唐詩選』（学習研究社、昭和六一年五月一〇日発行）では、

- ⑧ 我が友は ここ西の地 黄鶴楼に 別れを告げ
霞たなびく花の三月 揚州へと 下って行く

と、訳している。また、中国詩人選集に収められている武部利男注『李白・上』（岩波書店、昭和三二年十一月二〇日発行）には、

- ⑨ 友人は黄鶴楼にわかれつげ、これを西にして、かすみ立つ三月、
はなやかな揚州に向つて長江を下る。

と、口語訳しており、寛久美子氏の『鑑賞中国の古典16・李白』（角川書店、昭和六三年八月三十一日発行）では、

- ⑩ 友は、ここ西のかた黄鶴楼に別れを告げて、かすみたなびく春三月
花の都会の揚州に下っていく。

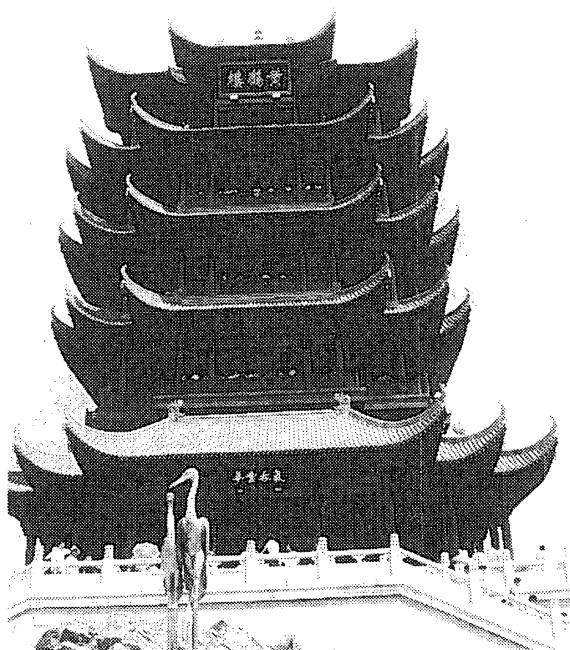
という通釈を施している。また、前野直彬・石川忠久編『漢詩の解釈と鑑賞事典』（旺文社、七九年三月一日発行）では、

- ⑪ わが親友、孟浩然君は、この西の黄鶴楼に別れを告げて、春、花がすみの
三月に、揚州へ舟で下ってゆく。

と口語訳している。以上、十一例の通釈を眺めてきたが、第一句の口語訳はニュアンスの違いはあっても、「わが友人の孟浩然君は西にある黄鶴楼に別れを告げて」と訳している。しかし、第二句には二通りの通釈がなされていることが分かる。問題となる詩語は「烟花」である。もう一度、諸家が訳した「烟花」の部分抜き出してみよう。

- ① 花咲き春霞立つ
② 春がすみに花々の煙る
③ 春もやに花咲きかおる
④ 春がすみに花咲き匂う
⑤ かすみと花に包まれた
⑥ 春霞に花の咲く
⑦ かすみたなびき花のさきそろった
⑧ 霞たなびく花
⑨ かすみ立つ
⑩ かすみたなびく
⑪ 花がすみ

とある。右の語釈を比較するとはつきりするが、①から⑪までの語釈には二通りの意味が存在している。つまり、「烟花」は、「烟」と「花」とに分けて、「霞」と「花」に訳すものと、もう一つは「烟花」を一つの熟語とみなしているものである。前者に分類されるものには、



現代の黄鶴楼

①から⑧までの八例があり、後者に分類されるものは⑨から⑪までの四例である。前者に比べて、後者の訳例が極めて少ないように思われる。

『大漢和辞典』（大修館書店）を引くと、「烟花」の意味には、かすみと花。春の景にいふという説明がなされており、その後に、李白詩の「故人西辞黄鹤楼 烟花三月下扬州」が例として取り上げられている。「烟花」を『大漢和辞典』を引く限りにおいては、①から⑧までの「かすみと花」と分けて訳した方に軍配があるように思われる。しかし、⑧から⑪までのように、霞がたなびいている春景色という意味の「煙景」とか、「煙靄」という意味に採っても間違いではないように思われる。

花田英樹編「唐代研究のしおり」シリーズの『李白歌詩索引』（同朋社出版、昭和六〇年九月一〇日発行）を繙くと、李白の「烟（煙）花」の使用例は「黄鹤楼送孟浩然之广陵」詩中の「烟花三月下扬州」を含めて三例ある。他の例には、

○○宜落日（宮中行樂詞八首）

と、

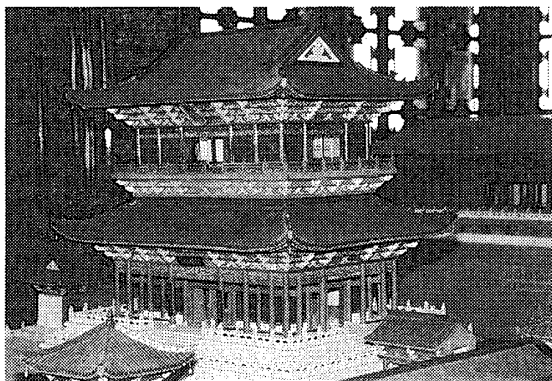
万国○○随玉輦（上皇西巡南京歌十首）

とがあり、その意味も「霞と花」に分けて使われているように思われる。だが、「黄鹤楼送孟浩然之广陵」詩に詠まれている「烟花」は「霞と花」の意味とか、ただ単に、「霞」という意味にとるべきではないと私は考えている。何故ならば、孟浩然の乗る帆かけ舟が霞たなびく三月に長江を下っていると仮定した場合、帆かけ舟が空と川の接する彼方で見えるはずがなからう。水平線の彼方で、ずっと掻き消されるように消え去るのが見えるのであれば、霞が立ちこめていないことにな

るのではなからうか。つまり、「烟花」を霞に関わる訳を施した場合には、「唯だ見る長江の天際に流るるを」という表現とは明らかに矛盾が生じることになる。であるならば、「烟花」にはもっと別な意味が込められているはずであると考えるのが自然ではなからうか。李白の佇立している上空は晴れ渡った青空が広がっているのは確かなことであろう。中国を訪ねる度に感じることはあるが、水平線や地平線などが何時もぼつと霞んでいのように見える時でも、上空は紺碧の空が広がっていることが多いからである。

前半の二句には、「黄鹤楼」と「扬州」という二つの固有名詞が詠み込まれている。固有名詞を詩中で用いる場合には、その固有名詞に何らかの意味を持たせるのが原則である。「峨眉山月歌」を例にとって説明しよう。「峨眉山月歌」詩も、李白の傑作中の傑作と言われている作品である。この詩中にも、「峨眉山」を始め、「平羌江」「清溪」「三峡」「渝州」というように、五つの固有名詞がちりばめられている。しかし、その多くの固有名詞が少しも目障りにはならず、却って漢字の持つ字面を巧みに利用して「峨眉山月歌」詩は見事な作品に仕上がっている。

少しく説明を加えるならば、「峨眉山」の「峨」にはそり立つ険しい高山のイメージを抱かせる効果があり、「平羌江」の「平」にはゆったりと流れる川がイメージされる。また、「清溪」からは清々しい秋のイメージが想起される。なお、「清溪」の元々の地名は「青溪（今の板橋街）」であるが、「青溪」の「青」には夏のイメージが漂う。つまり、夏



唐代の黄鶴楼（模型）

のイメージを抱かせる「青」よりも、秋に相応しい「清」を用いて、「清溪」と詠じたのである。「青」も「清」も「セイ」と読む。ここは、音通による字面を巧みに用いているのである。^{註①}こうした字面を巧みに用いている用例は李白の別な詩でも見ることが出来る。「客中行」詩を例にして取り上げてみたい。この詩の起句に「蘭陵美酒鬱金香」とある。「蘭陵の美酒」は「鬱金香」のように、西域に産する香草のような芳醇な香りを放っているという意味である。蘭とは香草の一種のフジバカマのことであるから「蘭」には「鬱金香」のような芳醇な香りを放っているというイメージを抱かせる効果がある。そういう意味を考えて固有名詞の「蘭陵」を用いたものである。

さて、本題に戻そう。李白の詠じた「黄鶴楼送孟浩然之広陵」詩も固有名詞の持つ字面を巧みに用いているように思われる。詩中に詠じられている固有名詞は「黄鶴楼」と「揚州」、それに「長江」であろう。だが、明らかに固有名詞と考えられるものは、「黄鶴楼」と「揚州」である。結句の「長江」は固有名詞ではなく、「長い川」という普通名詞と考えることもできるかもしれないが、ここでは一応固有名詞として扱いたい。

もう一度、「黄鶴楼送孟浩然之広陵」詩の前半の二句を示して、その後には考察を試みてみたい。

故人西辞黄鶴楼

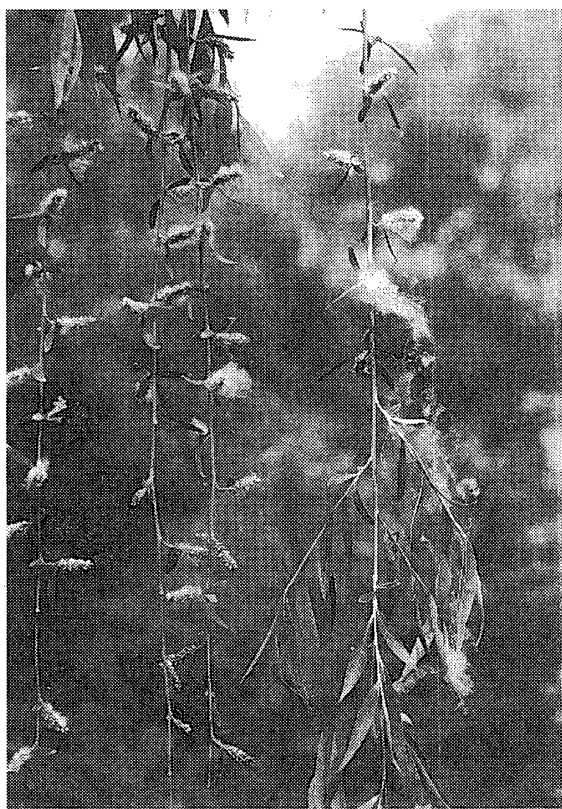
烟花三月下揚州（傍線部は筆者）

この前半の二句での固有名詞は前述した通り「黄鶴楼」と「揚州」である。この固有名詞の「黄鶴楼」は「烟花」との対比で考えなければならぬ。それは色彩の対比で考えればよいことなのである。「黄鶴楼」の場合は直に黄色を意識することが出来るが、「烟花」は直ぐに色彩を思い浮べることなどできないかもしれない。しかし、李白はこの対比は明らかに色彩を意識させている。「烟花」の色彩とは、どんな色を思

い描けば良いのであろうか。それは後述することにして、先ず、「揚州」について考えてみたいと思う。

この詩を読み解く鍵は固有名詞の「揚州」が握っているように思われる。それは「揚州」という固有名詞の用い方が見事であるからである。揚州は江蘇省の中部、揚子江の北岸にあり、大運河と揚子江の交差する地点にあるために、南北の物資の一大集散地として栄えてきた。揚州には外国の商人（アラビヤ・ペルシャなど）も数多くが滞在し、国際貿易港として大いに賑い、昔から水運や商業の中心地として繁栄してきた大都市で、「揚州の夢」とか、「揚州の鶴」という故事まで生んだ繁華な町であった。

そんな華やかな雰囲気の中、揚州へ友人の孟浩然が旅立つのを情熱家の李白が見送ったわけであるから、別れのわびしさとか、寂しさなど微塵も感じ取ることなど出来ないのは当然のことであろう。寧ろ揚州に向かう友人の孟浩然に対して羨望の気持ちさえ抱いているようである。羨ましいという気持ちは「烟花」という詩語に隠されている。も



柳絮

う一度、「烟花」なる詩語を『大漢和辞典』で引いてみよう。それには、「かすみと花」という意味の他に、「花やかでうるわしい喻」とか、「繁華」という意味もある。また別な意味には、「妓女」とか、「歌女」とか、「芸妓」とか、「娼妓」などの意味も添えられている。こういう意味を考えてみると、「晩春の三月、友人の孟浩然は妓女が多く、繁栄を誇る国際都市に向かって船出し、揚州に向かって」下って行ったのが羨ましく感じられたのは当然のことであろう。

固有名詞である「揚州」のもう一つの効果は「揚州」の「揚」の字面にあると思う。「揚州」の「揚」は音読すると「ヨウ」と発音するが、「揚」は別れのシンボルでもある「楊柳（ヤナギ）」の「楊」とも同音であるばかりではなく、字形も酷似している。また、現代中国語での発音も「揚」も、「楊」も「yang」と発音する。つまり、揚は楊（ヤナギ）を意識させたものであり、ここでは普通の効果を狙ったものである。

中国では旅立つ人にはヤナギの枝を折り、それを環状にして手渡し、再会を願う風習が古くから行なわれてきた。それは「環」と「還」とが音通であるからである。ヤナギを思い描くことはおのずと別れの場面を想定することに繋るのである。「揚州」へ向かう孟浩然を見送る李白の頭上には、大空をふわふわと流れるように飛ぶ「烟花」が漂っている。この「烟花」こそ雪のように大空を舞う「柳絮（ヤナギの綿とか、ヤナギの花という）」のことであろう。詩中に、柳絮（烟花）を配することにより、別れの舞台装置が設定されるのである。また、「烟花」が「柳絮」であれば、白色が鮮明にイメージされ、固有名詞の「黄鶴楼」の黄色と見事に対比することになる。つまり、前半の二句は、固有名詞の持つ字面を巧み用いていることが分かる。中でも、揚州の用法が素晴らしい。

B 後半の二句について

後半の二句は文字の異同を中心に考察を試みたい。

李白「黄鶴楼送孟浩然之広陵」詩考（渡部）

詩の後半も、前半の二句と同様に、諸家の通釈を掲げてみることにするが、初めに文字の異同について表示しておきたい。ただし、本論は、わが国では比較的広く読まれている『分類補注本』や『唐詩選』に従った。異文を次に掲示する。

孤帆遠影碧空尽	『唐詩選』など
征——映——山——	陸游『入蜀記』など
——暎緑山——	敦煌残卷

なお、中国の著名な学者である詹鍈が中心になって編集された『李白全集校注彙釈集評』（百花文芸出版社、一九九六年十二月発行）には、

孤帆遠影（二作映）碧山尽

とあり、「碧山」を採っている。

では、前半同様、諸氏の通釈を掲げてみたい。初めは武部利男注の『李白（上）』（岩波書店）から眺めてみたいと思う。

① たった一つの舟の帆が、だんだん遠ざかり、ついにその影が深い碧の空の

中に吸い込まれるように消えうせてしまう。あとにはただ、長江がはるかな空のはてに流れゆくのみ。

（傍線部及び波線部は筆者。以下同じ。）

と、ある。また、松浦友久氏の編訳の『李白詩選』（岩波文庫）では、

② ぽつんと一つ、遠ざかりゆく帆影は、碧玉のような青空に吸われて消えた。のこされたわが目に映るのは、天空の果てまでつづく万里の長江の流れだけ。

と、訳している。また、寛久美子氏は『李白』（角川書店）の中で、

- ③ ばつんと浮かぶ帆かげは遠く、紺碧の空に吸い込まれ、ただ長江のみが天の果てまで流れていく。

と、通釈している。斎藤响の『唐詩選（下）』（集英社）には、

- ④ たった一つの帆のかげが遠ざかってゆき、やがて青い空のあなたに消えた。あとにはただ長江の水が空のはてまで流れているばかり。

と、ある。石川・前野編の『漢詩の解釈と鑑賞事典』（旺文社）には、

- ⑤ 楼上からながめると、たった一つの帆かけ舟のかすかな姿が、青い空に吸い込まれて消え、あとにはただ長江の流れが天の果てへと流れてゆくばかりである。

と、訳されており、中島敏夫氏の『唐詩選（下）』（学習研究社）には、

- ⑥ たった一そう 遠い舟の 帆影が 碧（みどり）の空の中へと消えていく
あとには 天と交わる辺り 長く長く延びた揚子江の流れが 見えるだけ

と、通釈されている。安楽充郎氏の『唐詩百選』（かや書房）には、

- ⑦ 遠く、ただ一つ浮かぶ帆かげは、青空の中に消えてゆき、後はただ、天の果てへとつながる長江の流れを見ているだけ。

と訳し、青木正児訳の漢詩大系8『李白』（集英社）では、

- ⑧ 彼を乗せた船の帆影一つ次第に遠ざかり、遂に碧の山の彼方に消えてしまつて、後には唯だ見る長江の水が、ひろびろと天をひたして流れるばかり。

という、口語訳を試みている。以上、八例の口語訳を眺めたわけであるが、①から⑦までの口語訳はわが国で広く行なわれている『分類補注本』や『唐詩選』などを拠所にしたものと思われる。ただし、⑧の青木正児訳は、『分類補注本』や『唐詩選』などによるものではなく、異文による「孤帆遠影碧山尽」によって和訳したものであろう。

唐代には、詩文は全て手書きで書き写したのであるから異文が存在するのは当然のことである。詩文が楷書ではなく、草書や行書で書かれていれば、間違つて読み、それを間違つたままに書き写すこともあり得る。

例えば、李白の有名な「静夜思」詩の起句「牀前看月光」はテキストによつては「牀前明月光」となっているものもある。書道界のロングセラーである高田竹山監修の『五体字類』（西東書房、大正五年十二月十五日発行）をひもといて、「看」と「明」の行草書で書かれた書体を見比べて推測したいと思う。『五体字類』には、「篆書」を始め、「古文」「隸書」などとともに、「行書」や「草書」の代表的な書体が並べられている。参考までにそのコピーを示したい。



右の漢字（看と明）の行草書体を比較検討してみると、その書体は

明らかに違うので、読み違えることも、間違つて書き写すこともないように思われる。だが、じっくりと観察すると部分的にはかなり似通った部分もある。例えば、「**も**」(看)と「**つ**」(明)はどうだろうか。「看」の上の部分に、仮ににじみや汚れ、それにかすれなどがあった場合、「看」を「明」と読み違えることも起こり得ることが分かる。また、「山」と「空」の場合も同じようなことが考えられる。「**空**」(空)と「**山**」(山)では、「空」の上と下の部分にかすれとか、にじみなどがあつて判読が難しい場合には「空」を「山」と読むことになるかもしれない。これは飽くまでも推測の域を出ないのであるが、十分起こり得る。異本がこのような過程で広まっていたことも原因の一つとして考えられるのではなからうか。

第三句「孤帆遠影○○尽」の「○○」に「碧空」か、「碧山」を挿入せよと問われた場合には私は直ちに「碧空」を入れたい。

しかし、現存する李白の最古のテキストといわれる宋本の『李太白文集』(静嘉堂蔵)には「碧山」となっている。宋本版の『李太白文集』が唐代に最も近いものであるの

で、信用しないわけにはいかないが、視界を遮つてしまう「山」よりも、よりスケール大きく描かれている「空」の方が詩的な味わいも深く、格調もより高いものになる。つまり、別れの余情を醸し出すのは「碧山」よりも「碧空」であらう。また、尽きることのない無限の長江の流れに託して、惜別の情が詠じられる「長江」の用い方も旨い用法の一つである。さらに付け加えるならば、黄鶴磯に立つて、流れゆく長江の遥か下流



長江の流れ(揚州方面)

を眺めやつても、山らしい山は勿論のこと、一点の鳥影さえも認めることができない。この詩は実景をそのまま写生して、詩に仕立てあげたものと考えた場合は「碧山」よりも「碧空」がふさわしいことになる。

四 結 び

「黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る」詩は古来、人々の口に上る有名な作品である。しかし、これまでの通釈には疑問を抱かないわけにはいかなかった。殊に、第二句の「烟花三月揚州に下る」と第四句の「唯だ見る長江の天際に流るるを」という関係に矛盾を感じないわけにはいかなかった。矛盾する点は「烟花」と「長江天際流」という関係にある。それはこれ迄「烟花」をただ単に「霞」とか、「春がすみ」に花咲き香る」というような解釈が施されてきたからであろう。「烟花」は晩春(旧暦三月)の風物詩である柳絮のことである。固有名詞「揚州」の用い方は同音の「楊(ヤナギ)」を意識させる。別れの場面にはヤナギはつきものであるから、ヤナギを意識させる「揚州」の「揚」の用字は素晴らしいと思う。つまり、「揚」には漢字の持つ字面と音通とが巧みに用いられているのである。

第三句は「碧空」か、それとも「碧山」という詩語の問題は詩跡に佇立して判断すれば、直ちに「碧空」に軍配があがるだろう。何故ならば、黄鶴楼から見た下流の方角には、一点の山影も認めることができなからである。また、別れの余情を醸し出すには碧山よりも碧空の方がベターであることは言う迄もなからう。また、無限の惜別の情が込められている「長江」の用法も素晴らしい。この詩は固有名詞を巧みに用いた傑作の一つなのである。

(註①) 詳しくは、拙稿「峨眉山月の歌」考(『新しい漢文教育』第二十二号、平成八年五月三十日、所収)を参照。